

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録, インドの知財とロマンス
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 115, No. 1, pp. 28-29
Citation(English)	, Vol. 115, No. 1, pp. 28-29
発行日 / Pub. date	2018, 1



知財見聞録

インドの知財とロマンス

東京工業大学 工学院 経営工学系・経営工学コース 教授 田中 義敏

初めてのインド訪問

約13億1000万人（2015年統計）を擁するインドは、世界の主要国とは異なる独自路線で制度整備を行い、特有の文化と歴史を反映したユニークな制度運用をしている。インド訪問の機会を得たので、そのひとコマを報告する。

日本・インドの緊密な連携関係

BRICsの一角として急速に経済成長しているインド。わが国からの企業進出も目覚ましい。また2011年8月に日・インド包括的経済連携協定（JICEPA）が発効しているほか、インドは東アジア地域包括的経済連携（RCEP）の参加国でもある。

知的財産分野では、審査官への実務研修、講師派遣による人材育成、インド特許審査官に対する国際調査機関（ISA）・国際予備審査機関（IPEA）の審査実務研修等を通じ、両国の緊密な連携関係が構築されてきている。また、2015年6月にはインド商工省産業政策・振興局（Department of Industrial Policy and Promotion：DIPP）と日本特許庁の間で産業財産分野における協力覚書が締結され、知的財産分野における協力関係を強化している。

知的財産行政の本丸DIPP

知的財産行政についてはDIPPが、国としての政策を立案している。また、WTOやWIPO等の国際機関との交渉

窓口、さらには政策に基づく国内法の改正も担当し、政策および予算に関する国会対応も行う。

出願から権利化までの実務は、DIPP内の部局である特許意匠商標庁が遂行している。その予算は一般会計で、特許意匠商標庁の収益は全て国庫に納入され、年度ごとの予算折衝を経て、特許意匠商標庁へ配分される。

インドの多様性

インドには非常に多くの文化、言語が混在している。それが故、他国の異質な文化に対する柔軟性を持っているといっていだろう。国内に異なる文化や言語があるからこそ、異質なものに対する違和感を持たないのかもしれない。海外に対するオープンな感覚が外国からのアウトソーシングを受け入れるのに大きく貢献しているように思う。文化や言語の違いなどはそれほど大きな障害になっておらず、IT産業が国境を越えて成功した理由は、このようなオープンな感覚と数学力の相乗効果にあるとのこと。加えて、英語力も良い影響を与えている。

国内の貧困・格差問題は産業政策にも影響する。しかしながら、グローバル化と経済振興に力を入れている現状においては、大きな支援策を採ることはできないだろう。国内問題の解決よりも産業の国際レベルへのキャッチアップが優先されるようだ。当面は貧

困・格差問題が一層助長されるかもしれない。長期的には、徐々に格差は正にも力を入れ、国内市場を拡大・成長させることが必要であるとの議論があったものの、まだまだ時間がかかるだろう。

多くのCEOを輩出してきた理系の大学：インド工科大学

世界有数の科学者を抱えるインド工科大学（IIT）を訪問してきた。1991年にインド政府から発信された自由化、民営化、国際化を含む経済改革に呼応して、インド工科大学デリー校はいち早く知的財産教育を開始している。1992年の学部生向け知的財産ワークショップのほか、1993年にはインド理科大学院向け、1994年には学生向けと中小企業向けのワークショップを開催。さらに2001年にはWIPOの協賛による知的財産国際会議等、定期的に知的財産教育を実施してきた。

1994年にはインド工科大デリー校における知的財産ポリシーの策定、1997年には経営学部において、知的財産マネジメントの年間コースを開講し、同専攻に“IPR Cell”という知的財産の教育研究組織を設置した。

今回は筆者の訪問に合わせ、知的財産マネジメント特別講演を開催してくれた。経営学部の学生の知的財産に対する興味は大きいものがあり、多数の聴講者が集まった。

インドトップクラスの総合大学：デリー大学

翌日には、デリー大学での講演にも招待され貴重な経験をしてきた。デリー大学法学部でも、知的財産に関する教育が既に開始されている。学生からの要望や期待も大きく、法学部出身の学生にとっても今後は一つの職域になっていくと思う。しかし、知的財産権制度に関して教える教員が不足している問題があるとのこと。特許意匠商標庁から派遣される職員数も限られており、継続的な教育が難しいようだ。

また産学連携活動が、知的財産権制度と併せて重要な領域になっていくだろう。しかしながら現状では、大学と企業はとても遠い関係にあって、産学連携の実績がなく、軌道に乗るまでには時間がかかるだろう。

国内の貧困・格差については、あまり重視していないようである。デリー大学の教授からは「どの国にも存在することであり、インドだけに特有なものとは考えておらず、13億の人口のうち、1割が豊かになればいいと思う」

との発言もあったが、今後は、インド国内市場の構築による内需拡大が避けて通れないことになるだろう。

デリー大学では、法学部の教員および学生を対象とする特別講義を行ってきた。講義内容は、知的財産を企業の成長に活用するための視点をまとめたものであったが、法学部の学生にとっては、新鮮でかつ貴重な議論であったようである。

ロマンが残るタージマハル

「デリーまで来てくれたので、ぜひ」と、アグラにあるタージマハルに案内してくれた。デリーから車で2時間半ぐらいはかかったと思う。その全貌が目に入った途端、白く美しく輝くタージマハルに心を奪われた。

このタージマハルは、16世紀の初めから19世紀後半まで300年以上続いた、安定したイスラム国家であるムガル帝国の第5代皇帝シャー・ジャハーンが、1631年に逝去した愛妃ムムターズ・マハルを埋葬するために建設した総大理石の霊廟である。

ムムターズ・マハルは、夫のデカン遠征に同行している間に、彼の第14子を生み、その後36歳で産褥死した悲劇の妃。シャー・ジャハーンはその死を大いに悲しみ、彼女の廟としてタージマハルを建立し、毎週金曜日にお参りしていた。その建設は愛妃の遺言の一つを忠実に守った皇帝シャー・ジャハーンの深い愛情によるものであった。

後に皇帝は、タージマハルと対をなす形でヤムナー川を挟んだ対岸に黒大理石による自らの霊廟を造ろうとしたが、その夢はかなわなかった。アグラ城から白く輝くタージマハルを眺め続け、愛妃を思いながら、彼は生涯を終えてしまう。

タージマハルの建設に膨大な時間と費用をかけたが故に、国民の反感を招き、皇帝は晩年、自分の息子に幽閉されてしまった……ということのようだが、この世に二度とないロマンチックな史実だ。清く素晴らしい歴史を残してくれたと心から賞賛したい。



インド工科大学での講義



タージマハルと筆者